



ストリング・ゼム・アロング

☆=ジョージ・カックル

第16回

### 人々が描く、ジプシーへの様々なイメージ

ジプシーと呼ばれる民族は、6世紀から11世紀にかけて、インドから流れてきた旅人たちだ。なぜインドから出てきたのかは分からないが、今やアジアを除いた世界中の国に住んでいる。一般にはヨーロッパで生活している移動型民族だと言われているが、実は国としてはアメリカに100万人ほどもいて、次に多いのはブラジルの約80万人だ。もともとはヒンズー教だったが、渡り歩いているうちにその地域の宗教を信仰するようになったそうだ。

ジプシーという呼称は、当初はエジプト人(英語でEgyptian)だと勘違いされ、そう呼ばれるようになったのが由来だそう。また、ジプシーという言葉は良い意味でも悪い意味でも使われる。旅をする自由な人や、エキゾチックな人をそう呼んだり、色っぽくてセクシーな女性を指すときにも使う。でもジプシーの人たちが暮らす国では、泥棒や悪者を比喩する言葉としても使われたり、様々な地域や団体を渡り歩く者を指す場合もある。

ちなみに、ジプシーは自分たちをRoma、Romと呼ばれるそう。そして昔は大きい幌馬車や木製の家を積んだような馬車で移動していたが、今はバス・キャンピング

カーを使っている場合が多い。今でも街はずれに止まって生活しているの、それが問題になっている国も多いという。

最初はアロー・ガスリーが73年にリリースした『最後のブルックリン・カウボーイ (Last Of The Brooklyn Cowboys)』(73年)に入っている「ジプシー・デイヴィー」から始めよう。この曲は、当時のLPにはウディ・ガスリー(アローの父親)の作曲とクレジットされていたが、実はイギリスで1720年に「Gypsy Laddy」という曲名で発表されたという記録がある。この曲はそれから200年以上の間、英語圏の世界では様々なタイトルで歌われてきた。



Arlo Guthrie  
"Last Of The Brooklyn Cowboys"  
Reprise [US] ●MS2142  
[1973] ◆Koch [US]  
©KOC-CD7952

incl. 'Gypsy Davy'

シールたちと逃げたしまう、という内容だ。アローが歌う「ジプシー・デイヴィー」は、ある日、この曲の主人公の親分が帰ってきて、自分の女の所在を主人公に尋ねた彼は、ジプシーのデイヴィーと駆け落ちしたとだけ親分に伝える。すると親分は、彼にこう言う。「Saddle for me my buckskin horse」俺の河原毛の馬に乗れるよう用意してくれ。「buckskin」とは鹿の革の色をして、'buckskin horse'はその鹿革の色をしている馬のことと言う。安い馬ではない。

そして、「And a hundred dollar saddle」100ドルの鞍と歌詞は続く。高い鞍だ。この親分が金持ちだということがわかる。

ここから主人公は、親分と一緒にジプシーの馬車が残した車輪の溝を頼りに女を探しに行く。馬に乗り続け、月が天高く昇る真夜中になるとキャンブ・ファイアが見えてきて、ジプシーが奏でるギターの大きな音色や盛大な歌声が聞こえてきた。もちろん、ジプシー・デイヴィーもその中の一人だ。すると、キャンブ・ファイアの光で輝く、女の顔が見えた。「Her heart in tune with the big guitar」彼女の心はその大きなギターと同じキーンになっていた。ジプシーたちにすっかり魅了されてしまった。

る女の心境が、うまく表わされている。ここで、親分は彼女に尋ねる。このジプシー・デイヴィーと歌うために、家を捨てたのか？ 赤んぼを見捨てたのか？ 俺のことも見捨てたのか？ すると彼女が答える。ええ、そうよ。でも青い目の赤ちゃんは捨てない。女は微笑んでいたが、その頬を涙が伝った。結局、彼女は親分と戻ることはせず、赤ん坊とも離れ、ジプシーと共に去ってしまおう。裕福だが窮屈な生活よりも、貧しくとも自由に満ちた生き方を選んだ女性。このアルバムのジャケットは、女を馬に乗せて連れ帰らなかった親方の心情を表わしているのだろうか。

次はシェールの「悲しきジプシー (Gypsies, Tramps And Thieves)」を見てみよう。これはジプシーの若い少女が主人公だ。ジプシーは差別されながらも、街の人



Cher  
"Cher"  
Kapp [US] ●KS3649 [1971]  
◆MCA [US] ©MCAD31376

incl. 'Gypsies, Tramps & Thieves'

たちが踊りを見に来たり、音楽を聴きに来たり、占いや博打をしに来たりと、彼らのもとへ人々が集まってくる。そんな生活ぶりが分かる曲だ。71年の全米チャートで1位になった曲でもある。なお、「悲しきジプシー」を収録したアルバム「Cher」(71年)は、この曲のヒットにより「Gypsies, Tramps And Thieves」とタイトルが変更され、16位のヒットとなった。

主人公の少女は、「I was born in the wagon of a travelin' show」私は旅する芸人一家の馬車の中で生まれた。ジプシーが、様々な地域を旅しながら暮らしていることが分かる。そして、母はチップのために踊っている、父はできることは何でもやっていた、と歌われる。時には「Doctor Good」を売り教えたり、時には「Doctor Good」を売りさばっていた。この「Doctor Good」は、なんでも治ると言うインチキくさい薬だ。

そして、次のコーラスではこう歌われる。「Gypsies, tramps and thieves」ジプシー、放浪者、泥棒。We hear it from the people of the town」そんな街の人たちの声が聞かせ。But every night the men would come around, and lay their money down」ただで男たちは毎晩やっ



The Impressions  
"The Impressions"  
ABC-Paramount [US]  
●ABC450 [1962] ▶ゲフィン  
(ユニバーサル) ©UICY93194  
incl. 'Gypsy Woman'

スしたのが「ジプシー・ウーマン」。61年のことだ。この曲では、ジプシーの女性が持つ色気が歌われている。「From nowhere, through a caravan around the campfire light」＝キャンパ・ファイアの光のあたりから、忽然とキャンパヴァンが現われた。「A lovely woman in motion, with hair as dark as night」＝その髪は、髪の毛の色が闇夜ほども黒い女性が踊っていたんだ。「Her eyes were like those of a cat in the dark」＝彼女の目は暗闇の猫の目のようだった。「That hypnotized me with love」＝彼女は愛で僕に催眠術をかけた。ここからコーラスが「She was a gypsy woman」＝それはジプシーの女だった、と繰り返す。彼は彼女が男たちと朝まで踊っているのを遠くから見ているだけで、彼女と話すこともできない。しかし、男は彼女に惚れてしまう。そして、知らないうちに

夜が明けていた。魅力的なジプシー女も、キャンパヴァンも消えていた。残っているのは、ジプシー女に降伏した自分のハートだけ…。ジプシーには、こんなイメージもあるんだ。こんなふうには魔法をかけられた男を歌ったこの曲は、R & Bチャートでは2位に、ポップ・チャートでは20位になった。●  
最後はフリートウッド・マックの「愛のジプシー」。メンバーのステイヴ・ニックスが、自分のことを書いた曲だ。彼女は「この曲でのジプシー女をイメージして、自身やステイヴのパフォーマンスを演出した。きつとヒッピーの時代に影響された、エグゼクティブなジプシー風のイメージが好きだったんだろう。この曲は82年にチャート1位となったアルバム『ミラーージュ』の曲で、シングルでも12位まで上がった。「So I'm back, to the velvet underground. Back to the floor, that I love. To a room with some lace」＝あたしは帰ってきた、ヴェルヴェットみたいに柔らかな地下へ。レースや造花で飾られた、あたしが愛するこの部屋へ…。いかにも彼女らしい曲の始まり方だ。そして、Back to the gypsy that I was」＝ジプシーだった

若い頃に、「もう一度戻るのよ」と続く。●  
その次のヴァースでは「Well, lightning strikes. Maybe once, maybe twice. Ah, and it lights up the night. And you see your gypsy」＝稲妻が一度か二度走って夜の闇を照らすと、あなたは自分の中にあるジプシーを目にするのよ、と歌われる。子供の頃は、少し恐怖を持ちながらも自由に向かって突き進む。ここでの「ジプシー」とは、かつての自分にあつた冒険心のようなものを指すのだろう。もう若い人間でも、自身を深く顧みれば、まだジプシーのように自由を求める魂が残されているはず。そんなメッセージがこの曲のテーマだ。ジプシーという言葉には、様々な捉え方がある。旅人、民族、犯罪者、エグゼクティブな人。それをどのように使うかで、差別用語になったり、ロマンティックな言葉になったりするんだ。●



Fleetwood Mac  
"Mirage"  
Warner Bros. [US] ●1-23607  
[1982] ▶Warner Bros. [US]  
©23607-2  
incl. 'Gypsy'

て来て、お金を置いていった…。これは、恐らく博打の掛け金のことだろう。セカンド・ヴァースではストーリーが続く。モービルという街の南で男の子をワゴンに乗せてあげ、食べ物もあげた。私は16歳で彼は21歳だった。メンフィスまで一緒に乗ってきたけれど、もし私と彼が何をやってたかお父さんが知ったら、彼を撃つてしまっただろう…。そして、もう一度コーラスに入る。サード・ヴァースでは、私は学校に入っていないけど、彼はスムーズな南部のスタイルで私に教えてくれた、と歌われる。これは、彼にセックスのことを教わったという意味なんだ。そして、3か月後には私は「gal in trouble」＝問題を起した女になっている、と続く。つまり、妊娠してしまった。そして、彼のことはもうしばらく見かけていないと歌われ、コーラスが入って曲が終わる。旅芸人一家の厳しい生活様様が、生々しく伝わってくる。●

ポール・シーベルが71年にリリースした『ジャック・ナイフ・ジプシー』は、話題にはなったがセールスには結びつかなかった名盤だ。このアルバムのタイトル・トラックにも、ジプシーという言葉が出てくる。

でも実際は、ジプシーというより強盗がテーマの曲だ。こんなふうには、ジプシーという言葉は差別用語としても使われている。この曲は主人公が辻強盗に遭遇する話。その強盗の名前が曲のタイトルだ。ジャック・ナイフは、犯罪者がよく使う折りたたみ式の刃物。ファースト・ヴァースでは、俺の命を取らないでくれ、子供たちもお腹を空かせているし、妻は病気だ。俺は馬の餌を作る工場で働いている。金は持っていないが、命は奪わないでほしい、と頼む。セカンド・ヴァースに入ると、曲の主人公も昔はジャック・ナイフ・ジプシーと同じ道を生きていたことが分かる。「I know your problem, I've lived on the street」＝俺はお前の状況が分かる。俺もストリートで暮らしたことがあるからね。それから、こうも言う。「Too much of nothing, can make us very small, but if you cut me



Paul Siebel  
"Jack Knife Gypsy"  
Elektra [US] ●EKS74081  
[1971] ▶エレクトラ(ワーナー) ©WPCR15230  
incl. 'Jack Knife Gypsy'

deep, we'll have nothin' at all」＝何も無い日が続くと、俺たちは人間的に小さくなってしまふ。でも俺を深く刺してしまつたら、お前にとつても何にもならない。●  
次のヴァースでは、そのジャック・ナイフ・ジプシーが実は近所の人間だということが明かされる。「Jack Knife Gypsy, I see you don't look so good」＝ジャック・ナイフ・ジプシーよ、お前は最近あまり体調が良くなさそうだ。そして、お前の母親も父親も俺は知っているんだと話は続き、「Come see me next payday, I'll see what I can do」＝次の給料日に来てくれ。できるだけのことはしよう、と歌われる。●  
最後のヴァースでは、強盗を落ち着かせることに成功した様子が歌われ、主人公が言う。「I once held the knife the same way that you do」＝俺もかつてはお前と同様にナイフを持っていた。「So you see there ain't much difference from me and you」＝だから、俺とお前の違いはそんなにないんだ…。ジプシーという言葉の使われ方の一端が垣間見える曲だ。●

カーティス・メイフィールドがインプレッションズのメンバーだったときにリリース